

9 成田国際空港対策

9-1 目的

成田国際空港を離着陸する航空機から発生する騒音の実態については、成田国際空港株式会社が今後の航空機騒音対策に資することを目的として実施しているものであり、本市の状況について測定データの提供を受けている。

平成15年度までは夏季と冬季の年2回、野間谷原地先及び旧あやめ荘屋上の2箇所測定、平成16年度から平成22年度までは、年1回測定を行っている。

今回の測定は、年間発着可能回数の拡大により航空機騒音が増加した。これにより市内で滑走路に最も近い関地区から「最も騒音影響の大きい時期での測定」と強い意向により、市が成田国際空港株式会社に要望し平成25年1月に実施したものである。

9-2 測定地点

香取市関525番地近傍

9-3 測定期間、時間帯

平成25年1月9日（水）～15日（火）（7日間） 6時～24時

9-4 測定及び集計方法

精密騒音計及びレベルレコーダーを用いて、成田国際空港北側の上空を飛行する航空機騒音を可能な限り測定し、「航空機騒音に係る環境基準」に従って、暗騒音より10デシベル以上高い騒音を対象に評価した。

9-5 気象及び運航状況

測定期間中の空港北側の離着陸の割合は、離陸が98.4%、着陸が1.6%だった。

表9-1 運航状況

月 日	天候	風 向	風 速 (m/s)	北側運航機数（機）			離着陸比率（%）	
				離 陸	着 陸	合 計	離 陸	着 陸
1月9日	曇り	北	1.8	282	33	315	89.5	10.5
1月10日	晴	北北西	1.8	296	0	296	100	0
1月11日	晴	北	1.1	296	0	296	100	0
1月12日	晴	北北西	1.2	294	0	294	100	0
1月13日	晴	西北西	1.0	288	0	288	100	0
1月14日	雨・雪	北北東	4.2	228	0	228	100	0
1月15日	晴	北西	1.5	311	0	311	100	0
期間通算				1,995	33	2,028	98.4	1.6

※ （風向、風速は新島測定局における同日の最多風向、平均風速）

9-6 滑走路別利用状況

測定期間中の空港北側における滑走路別の利用状況は、A滑走路が全体の85.9%、B滑走路が14.1%となっており、圧倒的にA滑走路の利用が多かった。

表9-2 滑走路別航空機数

種別	離着陸の別	機数	合計	割合	総機数
A滑走路	着陸	27 [168]	1,742 [1,550]	85.9%	2,028 [1,901]
	離陸	1,715 [1,382]			
B滑走路	着陸	6 [281]	286 [351]	14.1%	
	離陸	280 [70]			

[] 内は平成23年度

9-7 測定結果

(1) WECPNL (うるささ指数)

航空機騒音の評価は、音質の特異性に加え、くり返し効果、昼夜の別等を加味したWECPNL (うるささ指数) によって行われ、環境基準もこのWECPNLによって設定されている。

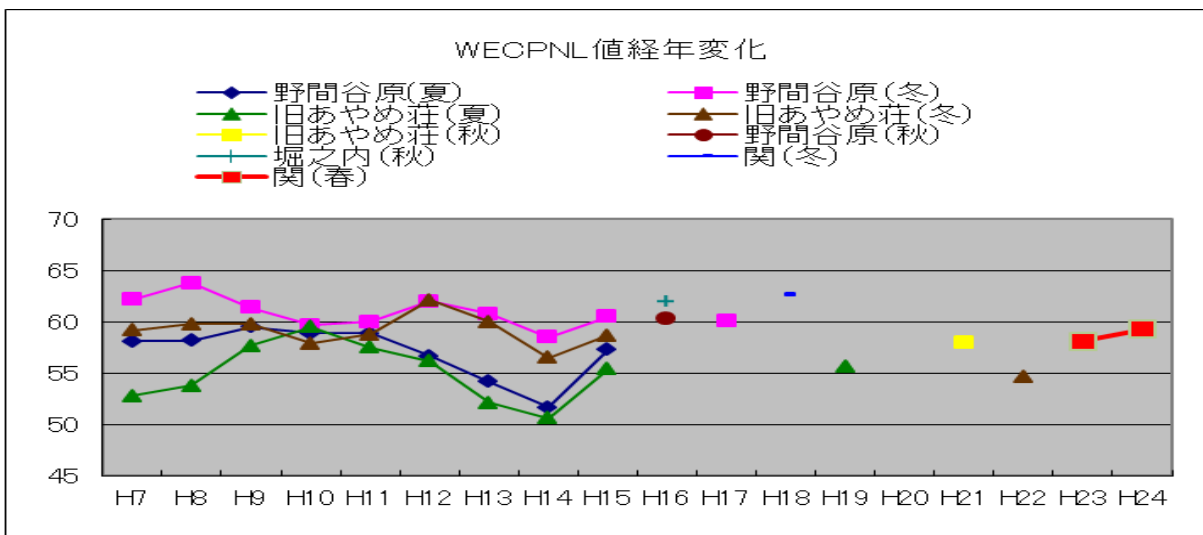
表9-3 測定結果の環境基準との比較

地域の類型	環境基準 (単位 WECPNL)	測定結果
I	70以下	59.3

I を当てはめる地域は専ら住居の用に供される地域

市内は、航空機騒音に係る環境基準の「地域類型指定」によって定められた「指定地域」ではないが、この計算方法によってWECPNLを求めると59.3Wで、環境基準値を下回っている。また、当市のWECPNLは近年60W前後で安定している。経年変化のグラフを下図に示す。

図9-1 W値経年変化グラフ



(2) 騒音レベル別機数

騒音レベルを60デシベル未満、60デシベル以上70デシベル未満、70デシベル以上に分けてみると表9-4のとおりとなる。

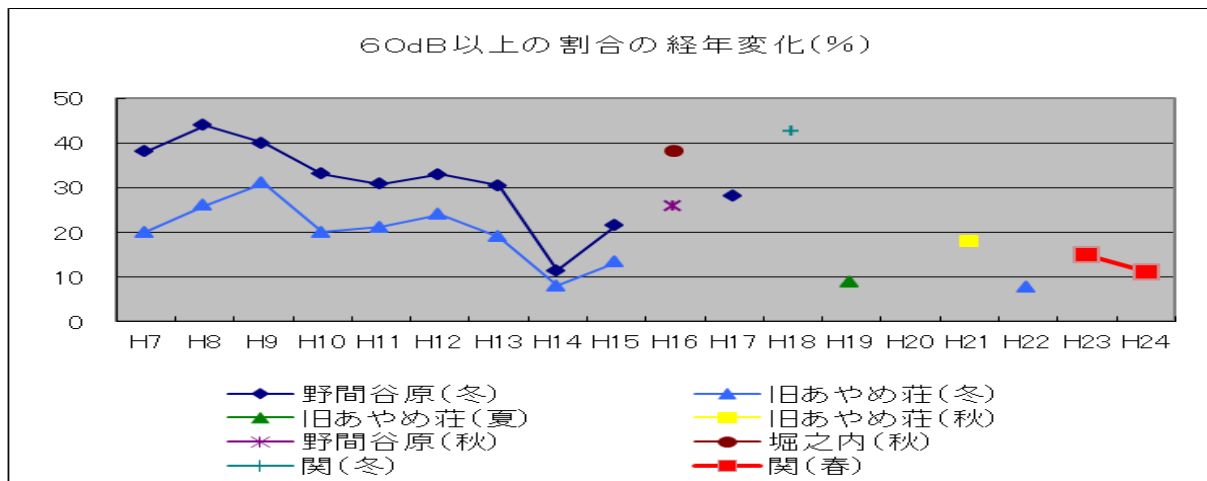
また、60デシベル以上の騒音を記録した機数の割合の経年変化は図9-2のとおりである。

表9-4 騒音レベル別機数

測 定 点	北側 離着陸機数	暗騒音+10dB 以上の機数	騒音レベル別機数			最大値 dB (A)	60dB以上 の割合
			60未満	60~70	70以上		
関地区 (関公民館)	2,028 [1,901]	1,077 [872]	852 [588]	212 [268]	13 [16]	77.4 [75.5]	11.1 [14.9]

[]内は平成23年度

図9-2 60dB以上の割合の経年変化



旧あやめ荘屋上のデータは、平成9年度が市役所屋上、平成7年度、8年度は県立病院屋上である。

(3) コース別60dB以上の航空機の割合(%)

着陸機に比べて騒音レベルが高い離陸機をさらに、コース別にわけて比較すると表9-5のとおりとなる。

表9-5 離陸機コース別60dB以上の割合(%)

行 先	関地区
アメリカ方面	28.2[62.1]
韓国、国内方面	4.5[7.3]
東南アジア方面	14.4[21.9]
ヨーロッパ方面	0[0]

[]内は平成23年度

9-8 考 察

航空機は風に向かって飛ぶため、空港北側においては、北向きの風の日には離陸機が、南向きの風の日には着陸機が多くなる。

今回の測定では北向きの風の日が多く、離陸機が98.4%と大部分を占め、香取市内に騒音影響の大きい離陸機の割合が多かった。

平成23年度の測定結果と比較してみると、騒音レベルが60dB以上の割合が減少しているが、最大値及びW値が前年を上回る結果であった。（平成23年度W値：58.1）

平成14年4月、成田国際空港のB滑走路が図9-3のとおり供用されたことから、当該年度の総発着回数は大幅に増加し約17.6万回（前年度比37%増）となった。以後発着回数は毎年増加し、平成18年度は約19.1万回となっている。

また、平成18年7月からは、一部の着陸機の高度引下げが実施された。これに伴い、成田国際空港株式会社が実施した高度引き下げ前・後の騒音値については「大差がなく、日々の変動の範囲内」との結果が出ている。

なお、平成21年10月にはB滑走路の北伸工事が完了し、本格供用が開始となり、平成22年3月末以降は年間総発着回数が20万回から22万回に拡大され、同年10月には、国・千葉県・本市を含む成田国際空港周辺9市町と成田国際空港株式会社との間で、年間総発着回数を30万回まで拡大することについて合意がなされた。

これにより成田国際空港は30万回に向けた空港処理能力のため、平成23年10月20日から、A・B滑走路から同時に離着陸する運行方法が導入され、年間23.5万回の運用が可能となり、平成24年度の年間発着回数は21.2万回となっている。

今後も市内航空機騒音分布状況の把握等、測定点の選定方法も考慮しながら監視を継続していく必要がある。

図9-3 標準飛行コース図

